
東方銀狼記

どぶろく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方銀狼記

【Nコード】

N0412N

【作者名】

どぶろく

【あらすじ】

病死した主人公。しかし、気が付くと・・・

狭い世界しか知らなかった主人公が色々と旅をする話。

プロローグ

—— 西暦20XX年 東京

—— 僕、神原樹は死んだ。

僕は生まれつき体が弱く、その為学校など数えるほどしか通えず、友達もいない。

見舞いに来てくれるのは両親と妹である藍だけ。

趣味と言えば病室でできるゲームや漫画といったものしかない。

そんな意味のない十八年の人生。

当然、こんな身体で生んだ親を呪いかけたこともあった。

しかし、両親も僕をこんな身体で生みたいと思っただけではないと分かっており、僕は遣り場のない怒りを胸に抱えるのだった。

そして、今、僕は家族に看取られて死んだ。

意味のない人生だった。

—— そう、何故か鮮明になった視界に、銀の毛並みの狼が現れ

るまでは。

プロローグ（後書き）

やっちまったZE！

この作品は、息抜きのために書いたネタ作品です。

他の連載もゴミみたいなものですが、コレはそれ以上になりそうです。

プロローグ 2

——これはどういうことだろう？

——僕は死んだんじゃないかったのか？

——目の前にいるコレは何だ？

——どうして僕の腕が銀の毛で覆われているんだ？

僕の混乱する頭に、そんな疑問が浮かんでは消えた。

目の前のソレは、そんな様子の僕に擦り寄ってくると、僕の顔を優しく舐めた。

僕は驚愕の声をあげた。・・・つもりだった。

「きゅー。」

口から洩れたのはそんな頼りない声。

その事実には愕然とすると同時、そばの水たまりが見えた。

そこに映る姿を見て、更なる驚愕が僕を襲った。

——赤子らしいあどけなさのある、小さな狼がそこにいた。

プロローグ3

—— 1週間後

僕は、草原を駆けまわっていた。

あれから、自分が狼に転生したことを知った。
あれから、自分がメスであることにも気付いた。

—— だが、それがどうした？

今の僕が感じるのはただ喜びだった。

病室と病室の窓から見える世界以外の世界を、こうして自分の意志で、自分の身体で自由に見て回れるのだから。

僕は今、遠目に見える人間の格好を見て驚いている。

獣の皮でできた服を着て、石を打ち欠いて作ったと思しき槍を持ち、仕留めた鹿を抱えた数人の男だった。

—— 何だ、あれは？まるで縄文時代のようにじゃないか？

そう思い、僕は男たちのあとを密かにつけた。

果たして小高い丘から見下ろしたところにあつたのは、まさしく縄文時代のような集落だった。

竪穴式住居、土器を作る女たち、少し離れたところにある貝塚・・・

そこまで見たところで何かに首筋に噛み付かれた。

このにおいはどうやら母さんのようだ。

そうして僕は巢穴に連れ戻されるのだった。

やはり、僕はうれしかった。過去の歴史の姿を確かにこの眼で見たのだから。

第1話 夜の森は危険です

集落を発見した日の夜。

僕は巢穴からこっそりと抜け出した。

大声で言えないが、その・・・催したので・・・

・・・で、用を済ませ、巢穴に戻ろうとしたところ、視界の端でなにか大きなものが動いた気がした。

未知への探求心で僕の心はいっぱいだったので、大した用心もせず
に森に入ってしまった。

森に入って大凡五分、僕は切り立った崖のそばに出た。
結局ここまで、大きな何かを見ることはなかった。

気の所為だったかと思い、来た道を引き返そうとしてソレに気付いた。

——頭から大きな角を二本生やした、ムチムチな黒光りボディのおっさんでした。

$$\begin{pmatrix} \circ \\ \text{Д} \end{pmatrix}$$

はい？

呆然とする僕にそれも気付いたのか、こちらを睨むと、

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

恐ろしい唸りをあげた。

それを見て、勿論僕は、

「#2 2...」

逃げた。どうしようもなく逃げた。

走れ、走れ、マキ。オー！！

逃げねば喰われる！！そんなもんです！！（？）

最早自分で何を思っているのか分からなかったが、とにかく逃げた。

這う這うの体で巢穴に辿り着いた僕は、自分が見たモノについて深く考える間もなく、死んだように眠りにつくのだった。

夜の森に自分ひとりではもう入らないと誓いながら・・・

第2話 とりあえず考察してみた

どうも、樹です。

狼に転生してから早いもので、既に六カ月ほど経ちました。

あの夜から分かったことですが、夜中に人里を離れると、そこはかなりの人外魔境になるようです。

多分鬼だと思われるアレに会うことはありませんでしたが、一つ目のナニカや大木をへし折るムカデなんかいました。

はつきり言って怖いです。何故かあちらから襲っては来ませんでしたが。

おそらく、これが俗にいう妖怪なのでしょう。実在するとは思いませんでした。

それと集落のほうで変化がありました。

稲作が始まったのです。

稲作をこの集落に持ち込んだ男と集落の人間の話を森で盗み聞きしたところ、曰く、

「遙か西のムラでは、古くから稲作が行われている」とのこと。

臃げな記憶を辿ると、確か稲作の伝来が紀元前七世紀ぐらいで、近

畿辺りで始まったのが紀元前五世紀ごろだったはず。

男の話とその知識で、今は少なくとも紀元前五世紀以降の年代で、ここは近畿より東の地方と当たりをつけた。自信はないけど。

イネの実りを待つ人たちの期待に満ちた顔がとても輝いて見えました。

あれは飽食の現代人では決して見れないものでしょう。

おや、父さんがこちらを見てますね。

どうやら巢に戻るよう急かしに来たようです。

もう少しムラの様子を見ていたかったのですが、今日は仕方ないですね。

そうして僕は巢穴へと帰って行った。

第3話 妹が産まりました

こんにちは、樹です。

僕が狼として生まれて、もう一年。早いものです。

精神は肉体に影響されると言われていますが、よく分かりました。初めは生肉に嫌悪感しかありませんでしたが、今では、肉が楽しみです。仕方ないのです。

ところで、一つ良いお知らせがあります。

三日前、新しい家族が増えました。妹です。妹が産まれたのです。

獰猛なことで知られる狼とは思えない愛くるしさです。つばらな瞳に銀色のモコモコとした毛並み。

かつての自分もこんなものでしたが、自分以外のものとなるとまた違って見えるのですから不思議です。

可愛くて仕方ないですが、それが寝顔となるともうたまらないです。

とても美味しそうで、じゅるりと涎が垂れそうになりました。で、そんな寝顔を堪能させてもらいました。ごちそうさまです。ハアハア。

この三日間、鼻から愛が溢れそうになるのを堪えてきた僕の苦しみは、とても理解できないでしょう。

僕は確かに幸福を感じていた。
しかし、それは長くは続かない。

第3話 妹が産まりました（後書き）

次回から本格的にしていこうかな？

第4話 戦火（前書き）

正直今回の話は、駆け足すぎたかもしれません。

第4話 戦火

森を駆ける人影があった。

年の頃はおよそ現代人基準で十六歳程度。
腰に届く銀の髪が特徴的な少女だった。

しかし様子がおかしい。

まず服を着ていない。

そして身体に矢が何本か刺さり、腕に抱く銀色からは紅い血が流れ落ちていく。

前世において神原樹と呼ばれたその少女は、強迫観念に囚われるように森を駆ける。

> 樹 <

僕は今、妹を剣で斬った隣のムラの男たちから逃げている。

事の発端はムラ同士の対立だ。

水田に引く水を巡って対立は深まり、緊迫した状況が少し前から続いていた。

そして今日、隣のムラがついに決起したらしい。

正直、見通しが甘かった。

まさか稲作が本格化してからわずかな時間で、戦争に発展してしま

うとは。

だから、僕は妹を連れ出すべきではなかった。

飛び回る蝶を追いかけまわす妹を、離れた場所から見ていた僕は間に合わなかった。

突然現れた男たちが戦の前の景気づけだ、と剣を振りかぶったのを見たときにはもう遅かった。

紅の線を引いて妹は宙を舞った。

スローモーションに見える光景なのに、僕はただ一步も踏み出せなかった。

数瞬遅れて、その光景の意味するものを正しく理解した僕は、前世も含めて初めて心の底から怒りを噴出させた。
あまりの激情に意識が途絶えた。

気付いたときには、僕は何故か人間と変わらぬ形になった腕の中に、妹を抱えて走り出していた。

視界の端に見える、肉を挟られて血の海に沈む男と、そいつに駆け寄り、僕を驚愕と恐怖が入り混じった表情で見る他の男たち。

そして、何かが空を切る音と僕の身体に走る衝撃。
それらを悉く無視して。

妹を抱えて逃げてきた僕は、馴染みのムラが見下ろせる小高い丘に

辿り着いた。

ムラはあちこちから煙をあげ、悲鳴と金属が撃ち合う音が鳴り響いていた。

ギリツと齒軋りする音がした。どうやら、無意識に齒を噛み締めていたらしい。

自分の今の状態も気にはなったが、妹のことのほうが重要だった。

僕は妹を地面に横たえ、傷の具合を診ることにした。

どうやら斬られる直前に飛び退いたようで、思ったよりは深くなさそうだった。

「キャ、キャウーン。」

「ご、ごめん。」

痛がる様子に思わず手を引つ込めた。

だが、このままにしておくわけにもいかない。

せめて傷を塞ぐ布くらいは欲しかった。

と、新たに村に向かう一団が目に入った。

そのうちの何人かに見覚えがあった。さっきの連中だ。

努めて頭を冷静にさせて様子を窺った。

多分僕が殺したあの男は、そのまま置いてきたらしい。

人を殺したことに罪悪感を感じないまま、僕の頭は冷静に判断を下す。

正直気が引けるが、あの男の服の布を頂戴しよう。

そして僕は、妹を抱えて来た道を引き返した。

第5話 狼は星と流れる

——これでよし。

妹の傷口を、男の服の比較的きれいな部分を使って縛り、僕は一息ついた。

そこで今更ながら、無意識とはいえこの男を殺したことで、村の惨状を思い出して身震いした。

——これが、戦争。

戦後久しい日本では、まず目にかかることはない人間同士が殺しあう光景。

その悲惨さをこの眼で直に見てしまった僕は、口元を抑えて茂みの影に駆けこんだ。

呼吸を深くついて心を落ち着かせていると、以前見たことのある一つ目の化け物が逃げるように走っていくのが見えた。それに続いて、色んな異形と獣たちが入り混じって同じ方向に逃げていく。

「こ、この臭いは・・・」

その臭いのする方向の森が紅い。
しかし、紅い葉の樹木が生えているという訳ではない。

風に乗って漂ってくる熱気と、焦げた臭い。

森が燃えていた。

「そんな！！あつちは・・・」

——僕たちの巣穴だ！！

その事実気付いた僕は、妹を慌てて抱えて全力で炎の方へ走った。

火花が散る音に混じって、剣戟の音が聞こえてくる。

火花が散る音に混じって、悲鳴が聞こえてくる。

火花が散る音に混じって、怒号が聞こえてくる。

火花が散る音に混じって、下卑た嗤いが聞こえてくる。

しかし、それらは僕の足を止める要因に決してならない。

僕はひたすら駆ける。前へ、とにかく前へ。

父さんたちの無事を認めるまで、決して足を止めない。

そう、そのつもりだったのに・・・

「あア？何だ、狼か。矢の無駄遣いになったじゃねえか。」

——ナンダッテ？

その言葉だけはいやに耳にこびり付いた。

心臓が高鳴る。

ゆっくりとした足取りでその声の方へ歩いていく。

そうして、矢が突き立って地面に倒れ伏す父さんと、その傍に立つ男を見つけた。

<男>

ムラから逃げ出した人間かと思って撃ったら、まさか狼だったとはな。・・・この矢、もう一度使うか？

にしてもこの狼の毛皮、なかなかお目にかかれるモンじゃねえぞ。儲けモンだなあ。

次の瞬間、俺は誰かに襟首を掴まれ、凄まじい力で地面に引き摺り倒されていた。

そいつの顔を見て俺は絶句した。

金色に輝く双眸と縦に裂けた瞳孔、そしてこの狼と同じ色の長髪の、今まで見たことのないほどの美女だった。

うつすらとその女から漂う瘴気のようなモノ。おそらくこいつは化生だ。

そして、無表情でありながらその眼差しに込められた明確な殺意。間違いなく殺される。

だというのにその瞬間、その魔性の美しさに俺は囚われていた。

「・・・何故、父さんを殺した？」

狼に眼を向けながら、玲瓏な声が紡ぎだされた。
何故か一切反抗する気が起こらず、俺はありのままを打ち明けていた。

< 樹 >

どうやら事故だったらしい。
それでも許す気はないが、いざ自分の意思で殺すとなると手が震えてしまった。

「今すぐここから立ち去って、二度とこの付近に来ないなら見逃してやる。」

男はコクコクと頷くと、時折こちらを振り返りながら、森の奥に消えていった。

「・・・父さん。」

その死体の背を軽く撫でた。
今はここに置いていくしかない。

「・・・後で迎えに来るから。」

死体を茂みに隠し、再び巣穴に向けて駆けだした。

母さんは巢穴の中で死んでいた。
巢穴には黒い煙が充満していた。死因は明白だった。

妹を左腕に、母さんを右脇に抱えて父さんの所まで戻ってきた。

父さんの隣に母さんを横たえ、僕は覚悟を決めた。

「きゅっ?」

眼を覚ました妹が、不安そうな鳴き声を出して僕を見やる。

「ここで待つて。」

言葉が通じたかは分からないが、妹は再び眼を閉じると、両親の亡骸に寄り添うように寝息をたて始めた。

僕は本能的に、今の自分がどういった存在なのか理解している。
必要なのは覚悟だけ。先程のあの男の時にはできなかったことだ。
僕は、この戦争を真っ先に始めた隣村の連中を許さない。

走る。何より速く、何より前へ。

いつしか僕は元の狼の姿に戻っていた。

ムラが見えてきた。

闘争は未だ続いている。

隣村の連中はこの土地の匂いがしないので、誰がそうなのかは直ぐに分かった。

槍を振るう男の首筋を一瞬で噛みちぎった。
その他も同様。

あつけないほどにその戦闘は終わった。
震えて倒れそうになる身体を、必死に支えてムラから立ち去った。

その背後で村人たちが、僕に両手を合わせて拝んでいることに気付かず。

そして、この一帯では狼を大神^{おおかみ}として永きに渡って崇めるようになるとも知らず。

妹の所に戻るとほぼ時を同じくして青空が曇り、雨が降り始めた。
この戦争で生まれた、すべての悲しみを覆い隠し、流してしまうかのように。

再び人の姿に戻った僕は妹を膝に乗せ、その頭を優しく撫でながら、憎らしいほどに澄み切った夜空を見上げていた。
銀の輝きを持った星が二つ、黒い天蓋を滑るように消えていった。

第5話 狼は星と流れる（後書き）

しばらく、シリ阿斯が続きそうです。

第6話 旅の始まりと覚醒（前書き）

すみません。

シリアスは続きませんでした（笑）

第6話 旅の始まりと覚醒

<伊月>

『樹』では男性っぽいので、読みは同じで漢字を変えて『伊月』と名乗ることにした僕・・・おっと、私です。流石に、『私』はまだ少し抵抗があるかな。

「父さん、母さん。いつてきます。」

両親の墓前に手を合わせ、一言挨拶する。

あの戦から一週間。

私は、妹を連れて旅することに決めた。

今の自分なら、前世では映像越しでしかなかった世界をこの眼で見回れるから。

「行こうか、亜衣？」

亜衣は前世での妹の名前を、私と同じように漢字を変えたものだ。

亜衣もあの日を境に妖怪化している。多分、私の妖怪化の時に傍にいたからだと思う。

亜衣を足元に侍らせ、取り敢えず暖かそうな南に行くことにした。

二日後。

「・・・スゴイ。これが、本物の海・・・。」

知識としてしか知らなかった、真夏の日の照り返しを受けて輝く海に私はただ圧倒されるばかりだった。

亜衣が、山越えで消耗した水分を摂るために海に近付いていく止める間もなかった。

「きゅ、きゅうううううううううう！？」

のたうちまわって舌を砂に擦り付けていた。

微笑ましい光景に私はクスリと笑い、海の水を少し舐めてみた。

うわ、しょっぱい。

海の水って想像していたよりキツイなあ。こりゃ水筒に入れられないわ。

それじゃ、今度は海を眺めながら西に向かうとしましょうか。

——で、私は今沖にいます。

海沿いに歩いてたら見つけた集落で、船と釣り竿を借りたんだ。いやあ、いい人たちだったなあ。

銀髪に白と黒の布地の着物。それだけでも当時の人間の格好じゃないのに、おまけに狼を連れて歩く不審人物だよ？普通、追い払ったりするもんでしょ？

まあ一応警戒はしてたみたいだけど、こつちから丁寧に話しかけたら、かなりフレンドリーになってくれたよ。

それで、釣り竿が置いてあるのを見て『魚釣り』をやってみたくなっただ。

村長さんに交渉したところ、釣果のいくらかを代金に船と釣り具を貸してもらえた。

——で、今に至る、と。

「フィッシュ。」

「フィッツシュ！」

「フィィィィィィィィィッッシュウウウウウー！！FOOO
OOOOOOOOOOOOOOOOOO！！」

イエーイ！！ノッてるかい！！？

いやあ、自分の才能が恐ろしい。まさに入れ食い状態。

魚の名称とかよく分からないけど、初めての釣りで色々大物が釣れるのは嬉しいね。

特に、やたらと牙の鋭い蛇みたいな魚とかかなり活きがよくて印象的だったなあ。

「（ヤバイヤバイヤバイ。）」

幸せの絶頂が一転、悪夢に変わってしまった。

脳内に前世の病室や両親、妹の顔、そして今世での両親と妹の顔が浮かんだ。

「（・・・まさか、これが走馬灯？前世では浮かんでこなかったのに。）」

そして、浮かんでくるものの中に毛色の違うモノがあった。ソレを認識すると同時、ソレを解き放っていた。

私を中心に、海に穴が開いた。

それは私の『引力と斥力を操る程度の能力』によるものだった。

船に上がり、岸に船を戻した。

これからは、泳げるようになってから船に乗ろう。

そう心に深く誓って、籠を担いで村長宅に向かった。

水浸しで戻ってきた私の姿に、皆驚いて心配してくれた。

そこで、私が泳げないことがバレてしまい、みっちり泳ぎを叩きこまれることになってしまった。

なので、しばらくはこの集落で足止めを食らうことになりそうです。

第6話 旅の始まりと覚醒（後書き）

ご都合主義、万歳！！

第7話 雪山での出会い（前書き）

サブタイトルが抜けていました。すみません。

第7話 雪山での出会い

<伊月>

「・・・もつと、熱くなれよおおおおおおおおおお
おおおおおお!!!」

この雪山を溶かすくらいに!!!」

旅を始めておよそ半年後のある雪山。

その山の中腹辺りの洞窟に、私の叫びが反響した。

「そ、そんなこと言っただつて。」

亜衣が情けない声を漏らした。

「だからさあ、自分が人間になった姿を思い浮かべて、
んでから妖力を全身に巡らせるだけでいいんだつてば。」

私は今、人化の術を亜衣に教えている。

自分が人間の姿をとる時の要領を教えているのだが、個人ごとに勝
手が違うんだろうか？

どうもうまくいかない。

・・・あれ？なんか火を焚いてるのに寒くなってきたぞ？

「あゝ、すみません。少し失礼していいですか？」

そう言いながら、全身真っ白な女性が洞窟を覗き込んできた。

「ぎゃあああああああああああ！？よつ、妖怪いいいいいい！？」

・・・我が妹よ。お前も妖怪だよ。それと、その叫びは女の子っぽくない。

まあ、それはともかく。

「何か御用で？」

「いや、吹雪がヒドイので中に入れてもらいたいですよ。」

・・・まんま雪女なのに？

「ま、まあ、取り敢えずどうぞ。」

「ありがとうございます。おかげで助かりました。」

そうお礼を言ってくる雪女（仮）。

正直今もかなり寒いんだけど、困ってるなら無碍にはできないし。

ちなみに、彼女は炎からかなり遠ざかっている。

そして亜衣は、隅っこのほうで人化の術の練習に没頭することにしたようだった。

「えっと、雪女だね？どうして吹雪で困ってるの？」

「まあ、雪女の一種ですね。産まれたばかりなので、力の加減がうまくいかなくて吹雪が手に負えなくて。」

「あ、申し遅れました。白岩深雪といいます。」

「妖怪ってのは、もう姓名揃ってるモノなんだろうか？」

「まあ、それならこつちも姓名で名乗ろうかな？」

「これはご丁寧に。神原伊月です。そつちは妹の亜衣。」

「狼の妖怪さんですか」。暖かそうな毛並み……。」

目を輝かせて亜衣を見つめる白岩さん。

「いやいや、冬の妖怪が暖かさを求めてどうするよ？」

「亜衣もその台詞にビクッ！！」ってなってるし。っていうか、亜衣もあまり怖がらないであげて？」

「そ、そつちやさつき吹雪を操ってるみたいなのを言っただけ、それが貴方の能力？」

「私は慌てて話を戻した。」

「はい、そうですよ」。『寒気を操る程度の能力』で、正確には吹雪を操ってる訳ではなく、冬の力を強めているだけなんですけどね。……神原さんも何か能力を？」

「私ののは『引力と斥力を操る程度の能力』。」

「結構使える能力だよ。物体を引き寄せたり放したりするだけでなく、概念的なものにも効果があるんだ。」

「と、言いますと？」

「例えば『気配』を私から引き離したら、誰も私の『気配』を感じ取れなくなる。」

『ある人物』に会いたくないと思って能力を使ったら、『ある人物』が私に会いたいと思っても遭遇するがなくなる。」

・・・そんな感じかな？」

「はあ。便利ですね。」

そう感嘆する白岩さん。

そう言えば、さっきからチラチラと窺うようにこっちを見てくるようないな？

あ、やっぱり今もまた。

「どしたの？」

「え！？あ、その・・・。」

なにか躊躇するような仕草をしていたが、やがて意を決したのか、私を真っ直ぐに見つめてきた。

「もし、よかったですけど・・・お友達になつて頂けませんか？」

<深雪>

「・・・お友達になつて頂けませんか？」

言えた。

産まれてからの望みをようやく。

こんな深い雪山では、大抵の生き物は冬眠や移住したりして目にかかることもなく、そして人間は私を恐れ、私の姿を見るなり逃げ出しました。

そして今日、洞窟から漏れる灯りと奇怪な叫び声に誘われて、この方と妹さんに出会いました。

妹さんに怖がられているのは心外ですけど、彼女たちと仲良くできたらと思っただけです。

<伊月>

友達、か……。

そう言えば、結局前世では友達なんて一人もできなかったな。

だから私はそう答えた。

「もちろん。だから、『伊月』って名前で呼んで。」

彼女の不安そうだった表情が一変して、喜びに満ちていた。

「じゃ、じゃあ私のことも『深雪』って呼んでください!」

その跳び付いてくるような勢いに若干押されながら、

「じゃあ、改めてよろしく『深雪』。」

手を差し出した。

ゆつくりと握り返してきた彼女のどこまでも白い手は、ひんやりとしていた。

一月後。

「・・・また会えますよね?」

雪解けが始まった山の麓で、私たちは別れの言葉を交わしていた。

「もちろんだよ。友達だからね。」

「深雪さん・・・。」

これから春になっていくので、彼女はまともに活動できなくなるらしい。

仕方ないことはいえ別れはとても残念だ。

でも、友人と遊ぶということが、ここまで楽しいこととは思わなかったなあ。

出会ってから一週間もすれば、亜衣も彼女に懐いていたし。こうして別れを惜しんで涙ぐむぐらいに。

結局人化はできなかったけど。

まあ、彼女は亜衣にとっても初めての友人だから良しとしよう。

「お二人ともーーーーー!!どうか、お元気でーーーーー」
「ーーーー!!」

深雪の姿が見えなくなるまで何度も振り返りながら、私たちは新たな世界を求めて旅を続ける。

<深雪>

・・・行っちゃいましたね。

たった一月のはずなのに、ここに彼女たちがいないことが猛烈な違和感に思えてしまうなんて・・・。

「・・・お姉さん、ないてるの?」

「え?」

背後に立つ、私と似た格好をした、うつすらとした紫の髪の少年が私にそう声を掛けてくる。

その少年の言葉で、初めて私は泣いていることに気付いた。

私は慌てて着物の袖で涙を拭った。

「えと、貴方は誰？」

おおよそ感情の起伏のない表情で少年は応えた。

「多分、お姉さんの同類……。」

その姿が、彼女たちに出会う前の私に被って見えた。

だから私は、

「私と来ませんか？」

そう声を掛けていた。

これが、後の私の伴侶との出会いでした。

第7話 雪山での出会い（後書き）

やあ。

炭酸飲料で腹を壊した私です。

まあ、元々炭酸は大嫌いなんですけどね。

第8話 フリーフォール（前書き）

書くネタがなくなってきた。
どうしよう・・・。

第8話 フリーフォール

<伊月>

「ア~~~~~アアア~~~~~」

ツタを使って移動するのなら、この掛け声は欠かせないね。
森というフィールドなら、これを一度やってみたかったッ！！

緑の景色が流れていく。風が耳元で唸りを上げる。

小川を越し、終点の岩肌の真上に到着した。

「イヤッホオオオオオオオオオオオ！」

「……取り敢えず、奇声を発するのはやめてよ姉さん。」

遅れてやってきた十三歳ぐらいの少女——亜衣が何か言っているが、爽やかな気分の私には聞こえない。

どれぐらい爽快かと言うと、新しいパンツをはいたばかりの正月元旦の朝のようだ。

「……まあいいや。それより姉さん、方角は分かってる？」

「おん？方角？………？」

ヤバイ。

こんなに深い森だと太陽が正確に見えないから分からない。

「・・・姉さんが『万遍なく旅がしたい』とか言って、いきなり北に向かうからこうなるんだよ。」

「いいじゃん。そのおかげで深雪に会えたんだから。」

「まあ、それはね。」

呆れたような表情だった亜衣も、この意見には同意のようだ。

「取り敢えず先に行けば、道は必ず拓ける。行くぞッ！」

「はいはい。そうなるように願ってるよ。」

私たちは足を踏み出し

[illegible]

あ、ありのまま（ry

今まであったハズの目の前の森が崖に変わってた。何を言ってるか

そして、踏み出してしまった足は止まらない。

「うううう時はどうすりゃいいんだっけ？」

ああ、そうだ。ボケりや良かったんだった。

「恋にFREEEEEEEEEEEEEE FAAAA
AAAAAAAAAAAAAAAAALL!!」

「うつさい、バカ姉!!」

そんな妹の罵声と頭上からのクスクスという笑い声と共に、私たちは底へと落下していった。

「はらほろひれはれ。」

そつか、能力を使えば良かったんだ!!

咄嗟に崖下に向けて斥力を出したおかげで、二人とも無傷で済んだ。

にしても、酷い目にあつた。

上を見ると、かなりの高さがあることが分かる。

多分あの笑い声の主が下手人だろう。うふふ、どうやってとっちめてやるうか？

「姉さん、あれ見て。」

そう言われてそちらに顔を向けると、少し離れたところに、この時代としては立派・・・いや立派すぎる社が建っていた。

まるで、ソレだけが時代を何世紀分も先取りしたかのような印象さえある。

どうも私たちはその社の裏手の崖から落ちてきたらしい。

「怪しさはあるけど、これだけ立派なら人もいるんじゃないかな？」

今この場において、一番怪しいのは私たちの方だと思っただが？

「・・・まあ確かに人はいなくても、人里は近いだろうね。」

そう思うと元気出てきた。

何か特産品でも交換できたらいいなあ。

「おや。妖怪・・・いや、妖獣かな？それがウチに何か用でも？」

また出鼻を挫かれた。

その声を掛けてきたのは、赤い服に注連縄が特徴的な女性だった。敵意とまではいかないまでも、警戒の眼を向けてきている。

「え、え〜と。お邪魔してます？」

取り敢えずそう言うしかなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0412n/>

東方銀狼記

2010年10月20日13時36分発行